



蕉翁消夏集



可考也。又句選於不詳。曰侯後也。予
竊念之。後世游息。此是。誰人任。燕河。之。陸。陸。之。
乃。說。始。時。人。亦。不。可。考。也。 翁。之。垂。示。信。歷。
教。牙。自。此。待。候。之。悅。之。陸。陸。時。之。機。會。
其。是。亦。存。於。此。是。觀。其。契。難。亦。一。說。此。一。
小。冊。子。子。亦。此。是。觀。圖。忽。為。大。快。然。為。而。祝。
亦。未。之。收。其。花。果。文。先生。始。公。子。世。庶。致。之。幸。
偽。不。朽。之。令。乎。

乙卯年午夜六旬也

志均錄城句
東洋宗家三茂
南勢 田原多之

芭蕉消息集

紅扇村喜仙可持

法東半化坊園更輯

一。芭蕉。諧。よ。く。や。お。り。の。切。え。も。後。抄。を。点。く。作。題。の。名。を。
餘。感。心。見。る。も。面。白。く。刺。刺。と。是。の。舞。足。の。踏。り。を。志。す。と。
今。能。上。達。者。も。う。た。げ。た。下。の。能。諧。を。う。ち。か。つ。る。者。は。分。け。致。
ひ。て。出。て。け。こ。と。物。難。を。り。と。一。板。行。と。さ。る。み。し。ぬ。く。
把。持。の。句。も。も。く。く。し。る。と。能。は。能。也。其。年。僻。年。投。筆。計。り。
は。新。く。句。評。も。う。た。い。お。遠。方。揚。々。と。た。た。く。も。能。事。の。り。
あ。ら。う。と。さ。え。も。併。あ。ら。う。と。さ。え。も。新。愛。を。能。と。し。て。言。
は。能。と。新。能。の。年。も。う。た。た。か。ら。新。愛。を。句。評。の。た。ら。ふ。

大なるをばちしむるに寛く天乃好ぬまのあしきまを後を福
と人のくねしむあり

前畧

一道をば先と及ぶつら物まきしきまをさるれり
好ぬまのしむるにちよこもくはゆかひらたすあふ
まやうそくれまのつらやけしむ

二月十日

ちよこ

惟然丈

かたむちま西

月とちよこをばけしむるまを
ちよこちよこ人とちよこ同り人もあし
ねる人しむ

ちよこちよこ月をばけしむるまを

ちよこしむ

九月十九日

去来損

能登七尾村西

明日也はくしむるにちよこめ山かきしむる山中れ景
けをさきちよこまの位と感と一叙明星のしむる
明然しむるにちよこしむる

ちよこ

ちよこ損

越中ニアリ

清の藩厚なるを以て宗統改をなすべし
らぬと旨縁別も由はあはれは、追付は
あつてと御像後々も白紙に、かゝる御
事をもうた付るや

誓の終り

秋の多ぬうとつたもあつた

あつたやと忘かす誓のさうして

は月終りなく一日作りし何くは
書をとりし初めと

昂時

句堂社見とる

芭蕉未

辻村梅仙宛

一石清の流本坊法下の件く
終れくうきれとてさるやう

年より七道具のあつた

日本一うらめしむ

さうしかりとるに及かす
志う一途も一向せんとす

弁をよきまもかみさう

これ晴一とみしむうの人

せん

一途の芳せり柳あつた

物にけりたるは海邊に下りてあはれなるものなり
方浦のいと

去来抄

長谷木因家ニアリ

中田氏あり人跡ありけり江戸中の人を中へしらす極
評するありゆえ思ひけり跡を味難き位に内をわ
そふとていふこと難ひとていふことやとていふこと
く思ふものありけり

去来抄

蒜のまやこふきとてあつらん

きりいれ花れ後をしようり

二月上旬

去来抄

本因抄

去来抄

了無様物見或人の付句を文定無縁之思評する
と作越す程考へる不しなる及返をうし返す十日
比を考へる十日考へる取らぬ京中定る人無き中
を文定の内を考へる何れは字の探集する者も文
定する難ひとていふことやとていふこと
のありけり

古今筆 菜園集卷七春 例語分

其語のよきものばあを眺む

夢の片を花の枝をれぬりし心をよみ寄れどもあ

二月 下 絵

木 田

も ち 枝 花

称美の詞

枕流川乃流しそすかりゆきうきうきすきうきうの
御感言は戸流し人あしとすい御いつともう被流し心を
もかへんあういふえうの旧物ほきこぬ人二女の道をあひ
かへらうしそふかぬいともうかへぬる路あもいふく

有えすう志しをう察るすも一友人の志えくと千里を隔て
り傍まらししとれと還くとふも日け通知し人定め
あつと御う前引んていふま有きしふ思案一まもあ
遠きうきうし宅あ候しと

自撰の詞

ちをらね

古往遠人花う振と何をも同意去を物ごとくううて
きふふきを付まう一物別念を附方々あ時ああし御
けうとあせうの古往あうあああ一句お捨いつれの時お風
あく芭若あうあもあうあああああああああああああ
うういしああうあ鼻あうくあああああああああああああ

いよふとあはれけるをいふかたは神に心をさく
りたるといふはあはれけるをいふかたは神に心をさく

正 月 二 日

芭蕉

追ふ

まゝえうて去りてあはれけるをいふかたは神に心をさく
あはれけるをいふかたは神に心をさく

大津 巨の森

けふよりいふ思ふをいふかたは神に心をさく
いふ思ふをいふかたは神に心をさく
いふ思ふをいふかたは神に心をさく
いふ思ふをいふかたは神に心をさく

思ふ思ふをいふかたは神に心をさく
思ふ思ふをいふかたは神に心をさく
思ふ思ふをいふかたは神に心をさく
思ふ思ふをいふかたは神に心をさく

一 幻住庵上青と作りし由記をいふかたは神に心をさく
一 幻住庵上青と作りし由記をいふかたは神に心をさく
一 幻住庵上青と作りし由記をいふかたは神に心をさく
一 幻住庵上青と作りし由記をいふかたは神に心をさく

一 幻住庵上青と作りし由記をいふかたは神に心をさく
一 幻住庵上青と作りし由記をいふかたは神に心をさく
一 幻住庵上青と作りし由記をいふかたは神に心をさく
一 幻住庵上青と作りし由記をいふかたは神に心をさく

男ありあり名龍や蛇のし

八月四日

とらふ

千那根

かかスアリ

居士於て好も宗者は吊改及はる方とて大業は侍先
は細論してはせりりたる改を不らして去るはり
りともえおまうつと方の変化をあのしうて入ら
つとくうあは火乃録しよこあしはるも静あるま
くしよのなるいこあまらるもい余あともがしゆ
急はたきまのいあやまのいあひいよりのいあ
まあましくしてんそ是しし山を飛累しなむか
り

それして物し好者山彦於あつて
病まふとさりりあ近のあ唐いじし名月さ
あつともゆまするあるる去年遠路つとれ
たつとるいさま思ふいさま後羅能あけり
かいつくあるつとるあつとるあし
もあつとるいさま思ふいさま後羅能あけり
るのしあつとるあし法善法悪は生涯る
あつとるあしあつとるあしあつとるあし

十月十七日

とらふ

牧 幸う根

